

認知症は、記憶の衰えを中心に、徘徊や性格の変化、不安、不眠などさまざまな症状を示します。我が国でも、近い将来5人に1人が、認知症を発症するかもしれないとの試算もあり、少子高齢化社会の現在において、克服すべき喫緊の課題です。大学や研究所、製薬会社を含めてさまざまな薬剤開発研究が進められてきましたが、残念ながらまだ有効な薬剤の開発には至っていません。

研究現場 発



名古屋市立大学大学院医学研究科
認知症科学分野教授

齊藤 貴志

認知症の克服を目指して

認知症の中で、最も患者数が多いのがアルツハイマー病の患者さんの脳の中で

は、アミロイドβとタウと蓄積していることが知られ、因物質が蓄積しているため、発症する前から原因物

認知症のモデル化から発症機構の解明へ

そこで、寿命が2〜3年であるマウスを使うことで、老化研究が進められています。しかし、マウスの

アルツハイマー病を発症する20〜30年前から、タウは発症の15年ほど前から脳の中で蓄積がはじまります。これらタンパク質の蓄積により、神経細胞が死んでしまいます。神経細胞は、他の組織と異なり一度死んだら再生できません。アミロイドβが悪の司令塔、タウがその命令を受けた殺し屋というイメージです。病気を発症した時にはすでに原

質が溜まらないように、もろくは蓄積したものを除去するような戦略が重要になります。獣医学の進歩に伴い、犬や猫の高齢化し、認知症を発症する事例が増えてい

ます。犬や猫の脳の中でもヒトと同様に、アミロイドβやタウが蓄積することが分かっています。世界中の研究機関で使用されており、現在、世界レベルでの共同研究を進めています。近い将来、できるだけ早く、有効な認知症予防薬・治療薬を開発したいと考えています。

アルツハイマー病モデルマウスの開発

